

近世日本の外交と貿易～歴博第3展示室から～

神山 知徳（昭和学院高等学校）

1 対象学年および教科・領域、実施日

高校3年生、6名、地歴演習日本史（2単位）

① 2020年8月19日（水）、② 2020年10月10日（土）、③ 2020年10月12日（月）

2 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 単元名：近世の貿易と外交

(2) ねらい

1 学習指導要領との関連

いわゆる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の手段として、学習指導要領でも博物館や資料館、図書館などの公共施設を積極的に活用することが推奨されている。他方博物館側も展示方法に工夫を凝らし、より具体的に当時の姿をイメージしやすい空間にすべく、リニューアルオープンを果たしている。それは国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）でも同様で、その第3展示室は2008年にリニューアルされ、その導入部分に「国際社会のなかの近世日本」と題する展示ゾーンを新設したのも、大きな展示変更であった。2022年に高等学校において新設される歴史総合では、開国以降の日本と世界の近現代史を学ぶことになる。この第3展示室の新展示ゾーンは、19世紀以降にヨーロッパ勢力の干渉・植民地化の動きが本格していく前段階を扱うことになっている。

このように学校教育における博物館利用が促される一方で、新型コロナウイルス感染予防からの「新しい生活様式」が提唱されるようになり、来館前提で行う多人数での博学連携のあり方も見直されざるを得なくなっている。そこで ICT 機器を活用しながら、教室内での授業から個人での博物館利用につながるような動機付けの道筋を付けてゆきたい。

2 単元の目標

16世紀になると、大航海時代の世界的な商業活動が明を中心とする朝貢体制を動揺させた。それにともなって、明は従来の貿易統制政策を続けることができず、海禁をゆるめて民間人の海外貿易を許した。その結果、当時急速に生産をのぼした日本の銀、ついでアメリカ大陸のスペイン植民地で採掘された銀が大量に中国に流入した。また中国の貿易商人たちは、東南アジア各地に進出して中国人町をつくった。東アジア・東南アジアにおける明の権威は弱まり、貿易の利益を求める勢力がみずから軍事力をそなえて競争する実力抗争の時代となった。

今回の授業で扱う17世紀以降、アジア諸地域はしだいに弱体化し、19世紀にはヨーロッパ勢力の干渉・植民地化の動きが本格化していった。17世紀に日本では江戸幕府が成立し、近世初頭の外交から、「鎖国」体制へと向かい、安定した幕藩体制を築いた。「鎖国」下のいわゆる「四つの口」を通じた貿易には、正式な国交を結んだ公式の貿易と、国交を結ばない私貿易がある。通常の授業では公式の貿易と私貿易の区別を前面に出して特に意識させる機会はあまりない。そのため、1871年に日清修好条規を清国と結ぶまで、近世に清との間で行った貿易ですら私貿易であったことなどは、恐らく気づかないままであろう。

また主権国家同士が対等に国交を結ぶという近代的な形式がごく当たり前という認識の下では、冊封体制、朝貢体制は理解されにくい。そのため朝鮮・琉球王国の近世東アジア世界での立ち位置を正しく理解しなければ、明治初年の外交で、宗主国である清国が起こした行動の意味は分からない。また幕府がオランダを、^{よしみ}誼を通じた国（通信国）とはみなさず、通商国として扱ったことを知っていなければ、幕末にオランダ国王の親書を拒絶したことも理解できない。開国後の国際関係を理解する上でも、その前段階にあたる近世東アジア世界の国際秩序を理解することは欠かせない。その理解をこの単元の目標としたい。

(3) 博物館との関連

1 活用方法：非来館型活用

歴博において、1983年の開館以来、逐次展示内容を大きく見直している。前述の単元目標にも掲げた「近世東アジア世界の国際秩序」の理解を可能にする教材として、今回歴博の第3展示室の導入展示「国際社会のなかの近世日本」が有効であると考え。近代初頭の外交まで学んだところで、冊封体制・朝貢体制という近世までの明・清を中心とした東アジアの国際秩序をこの展示資料から読み取ることは難くない。

「国際社会のなかの近世日本」はいわゆる「四つの口」を紹介したもので、朝鮮・琉球王国・清・オランダ・蝦夷地の4か国1地域との交渉の有様を、ヒトとモノの具体的な展示で表現している。今回の実践では展示物やそのキャプションを用い、館外活動という形で博物館の展示利用を行う。この実践では、そのうちの日朝間と日蘭間の貿易・外交のあり方に対比的に注目し、近世東アジア世界の国際関係を理解していこうとするものである。近世東アジア世界に残された朝貢や冊封といった関係ではなく、一見主権国家間の対等な関係を装いながら、むき出しの経済力・軍事力で服従を強いていくヨーロッパ列強がアジアに本格的に進出する前段階の国際関係を、モノやヒトの流れで具体的に考え、理解していくことができるようにしたい。

2 活用資料

第3展示室の導入展示「国際社会のなかの近世日本」

「オランダ使節の行列」（福岡県立図書館所蔵、シーボルト『NIPPON』第1冊）

「参府道中記」（歴博所蔵、ケンペル著『日本誌』）

※拙稿中、特に出典が示されていないものは歴博第3展示室の「国際社会のなかの近世日本」の展示物または自作の授業プリントである。

教材の提示・共有アプリとして、MetaMoji Classroom（株式会社MetaMoji）を使用

その他のICT環境として、電子黒板とiPad（第7世代）を使用

3 指導計画（3時間扱い）

〔第1時間〕古代から近代初頭までの外交のおさらい（8月第2学期開始時に実施済み）

※古代～中世の日本の外交や貿易のあり方について、現在の外交・貿易と異なる点を確認する。冊封体制、朝貢貿易、日宋貿易など。

〔第2時間〕 10月10日土曜日

段階	時間	○学習内容 ●学習活動	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	8分	●動画で第3展示室の「国際社会のなかの近世日本」をみる（自作動画）。	□歴博の展示を後で見直すことができる程度になるべく展示物に接近して動画を撮影しておく。 ■関心を持って展示を見ることができる。〈関心・意欲・態度〉
展開	12分	●展示パネル「江戸幕府を中心とした17世紀後半～19世紀前半の貿易と外交」をみて、朝鮮・清・琉球・オランダ・蝦夷地との貿易と外交のあり方について、共通するところ、違うところなどの特徴をまとめる。 ○朝鮮・琉球・オランダと幕府の間では使節の往来がある。一方で清と蝦夷地には使節の往来がない。	□前時の最後の宿題（各自のタブレット上のmetamojiのシートに実施）を参考にさせる。 ■使節の往来があるところとないところがある、破線状になっているところと実線になっているところがある。それらの違いに気づくことができる。〈思考・判断・表現〉 〈技能〉
	13分	●オランダとの貿易、朝鮮との貿易の特徴、外交の特徴に着目し、実際の展示ではどのように表現されているかを、キャプションを参考に、展示物をグルーピングしながら確認する。 ○「銀・棹銅」「生糸」「金・銀」「人參代往古銀」「書籍」「薬種・香辛料」などの輸出品・輸入品をみて、日朝貿易・日蘭貿易で盛んに交易がなされていることを知る。	□metamoji上の表に、キャプションの説明を読みながら各自で展示物の写真を移し、グルーピングした結果を全体で共有する。 ■キャプションの内容を展示物と結びつけることができる。〈思考・判断・表現〉 〈技能〉
	12分	●外交のあり方に注目して、オランダと朝鮮がどのように展示されているかをみる。 ○外交では通信使や倭館での生活など朝鮮との関係のみ取りあげられている（「正徳度朝鮮通信使行列図巻」「朝鮮通信使歓待図屏風」、「江戸図屏風」など）。オランダ商館内外でのことは詳しく紹介されているが、最初の展示パネル「江戸幕府を中心とした17世紀後半～19世紀前半の貿易と外交」にあるはずの「使節の往来」が展示されていない。なぜ？という疑問。	□展示物から、オランダと朝鮮との国交（使節の往来）の様子を示すもの（キャプション）を提示する。 ■多くの展示物から、必要な情報を取り出すことができる。〈思考・判断・表現〉 〈技能〉

[第3時間] 10月12日月曜日

段階	時間	○学習内容 ●学習活動	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	5分	<p>●宿題にしていた「4つの口と貿易関係・使節の往来他」の表の記入例を提示する。オランダとの国交が展示に現れていないことを想起する。</p>	<p>□「使節の往来＝国交があるはずなのに展示されていないのはなぜか。それとも展示ミスか。国交といえるほどではないのか。」など可能性を挙げさせる。</p> <p>■「博物館展示も完全ではないかもしれない。」など、歴史叙述・展示が絶対ではないことを感じ取る。〈意欲・関心・態度〉</p>
	10分	<p>●オランダ商館長の江戸参府の様子を描いたケンペル「参府道中記」（『日本』）、シーボルト「オランダ使節団の行列」『NIPPON』第1冊）など図に描かれているものが極めて少ないことを学ぶ。日本側の資料に積極的に書かれることはないことも併せて学ぶ。</p> <p>●朝鮮通信使とオランダ商人の江戸参府の様子を比べて、気づくことをまとめる。</p>	<p>□オランダ商人の登城の様子、将軍への謁見の様子なども併せて紹介する。</p> <p>□提供する画像は、metamoji上で事由に拡大して見ることができる。</p> <p>■朝鮮通信使とオランダ商人の江戸参府一行を比較し、適切に評価できる。〈思考・判断・表現〉</p>
展開	10分	<p>○朝鮮通信使は異国の遣いというそのままの感じ。オランダ使節団の参府の様子は、まるで大名行列。キリスト教の色はおろか、異国色を出すことさえも禁じられている。費用負担も自弁であることを紹介。</p> <p>発問1「幕府の役人が通信使とオランダ商人の江戸参府のあり方に、これほどまで明らかな違いを付けた理由は何だろう。」</p> <p>→予想される回答「いかにも異国風で派手な朝鮮通信使と、通例の大名行列のようで地味なオランダ商人の江戸参府。朝鮮通信使のように派手な異国の使節がわざわざ挨拶に来る。」「キリスト教を信仰するヨーロッパの国々との交流は、あまり人の目に触れさせたくなかったのではないか。」など</p>	<p>□オランダ商人の登城の様子、将軍への謁見の様子なども併せて紹介する。</p> <p>□提供する画像は、metamoji上で事由に拡大して見ることができる。</p> <p>■朝鮮通信使とオランダ商人の江戸参府一行を比較し、適切に評価できる。〈思考・判断・表現〉</p>

展開	10分	<p>発問3「朝鮮、オランダはこうした交流の持ち方をどう感じていたと思うか。」</p> <p>→予想される回答「朝鮮は滞在費用や登城費用などもすべて幕府負担であることから、よしみを通じている国（通信国）であると感じている。」</p> <p>「日本からも釜山の倭館に日本人を常駐させている。」「オランダも、費用こそは自分持ちであるが将軍にも謁見しているため、国交を結んでいるつもり。」「長崎にはオランダ人がたくさん住んでいる。」「日本からオランダに使節は送っているの？送ってなかったら、オランダの片思いみたいなものと考えられる。」</p>	<p>□朝鮮・オランダの当事者の視点に立って、自分たちの扱われ方について考えさせる。</p> <p>■朝鮮・オランダの当事者の立場に立って、自分たちの扱われ方に思いを馳せることができる。〈思考・判断・表現〉</p>
まとめ	5分	<p>●共有した情報をもとに、論述「近世日本の貿易と外交」（200字程度）を自宅での課題として書く。</p>	<p>□公式の貿易と私的な貿易の2つがあり、それがその後の日本の外交のあり方を方向付けることを指摘する。</p>

4 実際の展開（以下、生徒の回答）

〔第1時間〕8月19日 古代～近世初頭の外交と貿易を学んでの感想・疑問

1 分かったこと

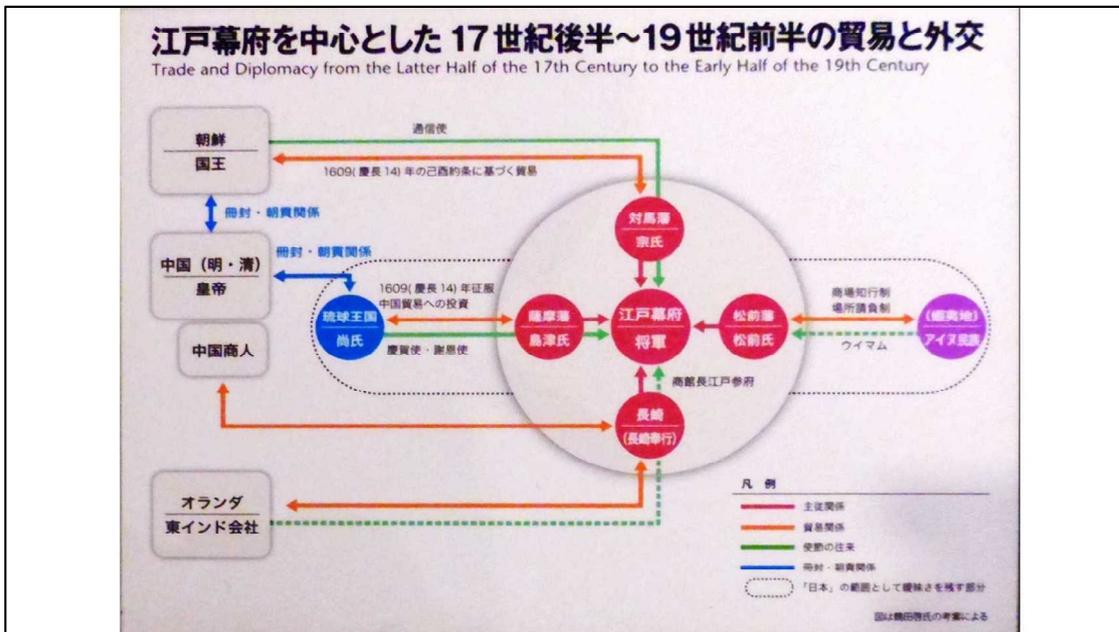
- ・その時々で需要がある国と交易し、需要がある物を輸入していた。
- ・外国と交流して日本も発展した。
- ・今とは違って朝鮮半島の国と結構仲が良い。
- ・日本は金がよく取れた。
- ・日本は木綿を多く輸入した。

2 疑問点

- ・江戸時代の貿易は四つの口で貿易していたが、その意味はあるのか。1ヶ所では駄目なのか。
- ・正式な国交をしなかった時と正式な国交の時があるが、何の違いがあるのか。
- ・なんで中国は朝鮮を攻めて領土を取らないのか。
- ・どうして日本が綿を作らないのか。
- ・鎖国して今まで輸入に頼っていた物をどうやって補ったのか。

[第2時間] 10月10日

1 歴博第3展示室の展示キャプション「江戸幕府を中心とした17世紀後半～19世紀前半の貿易と外交」をみて、その内容を読み取り、次の表を完成させよう



相手国（地域）	貿易関係	使節の往来	冊封・朝貢関係	その他
朝鮮	対馬を通じて 己酉約条	通信使、あり	中国と冊封	
清	長崎を通じて			
琉球	薩摩を通じて	謝恩使・慶賀使	中国と冊封	
オランダ	長崎を通じて	長崎に商人が 行く		
蝦夷地	松前を通じて	ウイマム		
疑問に思うこと 気づいたこと	アイヌや琉球との貿易が幕府が自らやっていないので、幕府は藩のことをかなり信頼していると思った。 どうして清と対等な日本が、清が冊封している朝鮮と対等関係にあるのか？			

2 朝鮮・オランダとの貿易の特徴を、展示物の写真を並び替えてまとめてみよう

朝鮮、オランダとの貿易の特徴 (貿易)

相手国	輸出品	輸入品	その他
朝鮮			
オランダ			











オランダ船貨物の変遷

17世紀後半から18世紀前半にかけて、オランダ船が運ぶ荷物の種類や数量が変化した。主に生糸、金、茶葉、陶器などが中心であった。

江戸時代前半の貿易品

Trade Goods in the Early Half of the Edo Period

オランダ・中国(清)との貿易の中心は、南代と同様、中国江南地域の高級絹織物や生糸や銅貨物の輸入、金銀を輸出することになった。とくに中国による銀の需要が高かったため多くの銀が輸出された。17世紀後半以降になると、日本国内での商品生産・流通が発達して貨幣の需要が高まり、貨幣の不足から金銀の輸出は制限された。また中国の需要が偏りに移したこともあって、茶葉の輸出が増加した。もともと、東南アジアからのオランダ船(通船)・中国船(貨船)ももたらしたもので、対馬藩と朝鮮との貿易で入ってきたもの、真神藩が琉球から手に入れたもの、アイヌの交易でもたらされたものは、それぞれ特色を持つ、ものが集まっている。それぞれのおもな交易品の内容やその変化については、各コーナーで記した。

交易の場―出高

出高はオランダの居住する場所である。商品を運ぶ場所である。船が運ぶものは、荷物の種類や数量が変化した。荷物の種類や数量が変化した。荷物の種類や数量が変化した。

貿易の実態

The Realities of Trade

貿易の実態は古くからの貿易によって生じたものであった。江戸時代には貿易が管理され、貿易の場が限定された。貿易の場が限定された。貿易の場が限定された。

輸出業者

荷物の種類や数量が変化した。荷物の種類や数量が変化した。荷物の種類や数量が変化した。

6

※タブレット (iPad) 上でキャプションや写真を適宜拡大して見ながら、その説明文にふさわしい輸入品・輸出品の写真を指で移動し、上の表の中に当てはめていく。以下同様。

3 朝鮮・オランダとの外交の特徴を、歴博の展示物を並び替えてまとめてみよう

朝鮮・オランダとの外交の特徴 [外交使節の往来]		
相手国	使節の往来の様子	その他
朝鮮		
オランダ		
疑問に思うこと		
気づいたこと		



交易の場—出島
 Commerce on Dejima
 交易場所—“出島”
 교역의 장소- 데지마(出島)

316

出島はオランダ人の居住する場であり、商品を取引する場でもあった。船が到着すると水門から荷物が運び込まれ、倉庫に納められた。時期によって出島の人札場で人札が行なわれ、商品が計量され引き渡された。表門、水門の鍵は出島之名が管理し、抜け荷や盗難を厳重に取り締まった。オランダ人の住居、日本の役人の詰所などの配置はほとんど変わらなかったが、倉庫や人札場などの位置は取引方法や商品の変化とともに変わっていった。



徳川将軍と朝鮮国王は、対等な関係を表す書式による漢文の書翰(いわゆる国書)をとりかわして、たがいを国の統治者として承認しあった。日本では、朝鮮との関係を「通信(信を通わす)の国」と表現した。朝鮮では、中国との関係を「事大(大に事える)」と表現したのに対し、日本との関係を「交隣」と呼んだ。ただし、江戸幕府と朝鮮王朝の関係者が直接接触する機会に限られており、日常的な交渉は対馬藩と朝鮮の訳官との間で行われていた。

朝鮮通信使の復旧
 Reviving Diplomatic Missions from Joseon
 “朝鮮通信使”(外交使節)的恢复
 조선통신사의 회복

文祿・慶長の役(壬辰倭乱・丁酉再乱 1592~98年)によって断絶した日本と朝鮮との外交関係は、豊臣秀吉の死後、修復の動きが起まった。対馬では、古代以来日朝間の仲介交易によって島民の生活を支えてきたので、対馬藩は積極的に修復を働きかけた。江戸幕府もその関係修復を期待した。他方、中国(明)や北方の女真族(のちの清)との間で緊張関係をもっていた朝鮮は、日本の動向調査、日本に連れ去られた捕虜の返還のために使節を派遣する。

4 朝鮮・オランダとの外交のあり方について、博物館ではどのように展示されているか

- ・オランダとの関係は曖昧で、出島関係ばかり展示されている。
- ・オランダとの関係がよく分からない。
- ・オランダとのことは出島での様子しか展示されていない。
- ・オランダの外交の資料が少ない。
- ・オランダの資料がない。幕府はオランダとの外交を求めている。
- ・出島しかない。

[第3時間] 10月12日

1 朝鮮通信使とオランダ商館長の江戸参府の様子を見比べてみよう。

以下の朝鮮通信使とオランダ商館長の江戸参府の様子を見比べてみよう

相手国	気づいたこと
朝鮮 (通信使)	
オランダ (商人の江戸参府)	

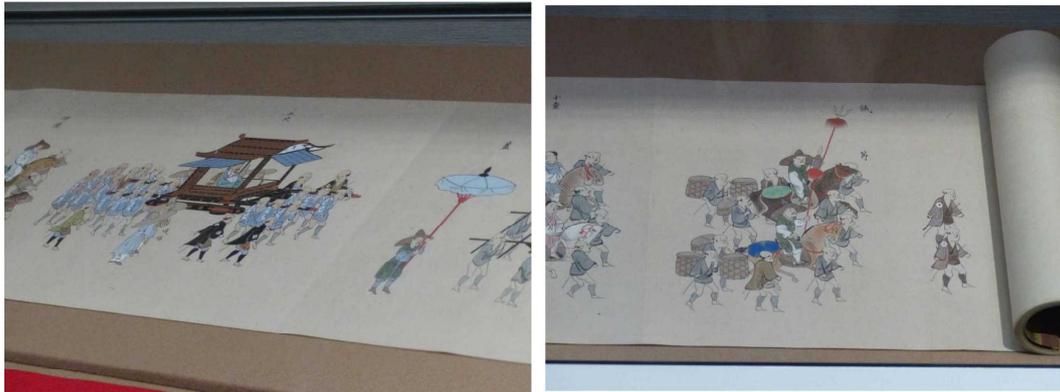
朝鮮通信使の江戸城登城の様子



朝鮮通信使の江戸城登城の様子（拡大図）



朝鮮通信使の江戸城登城の様子

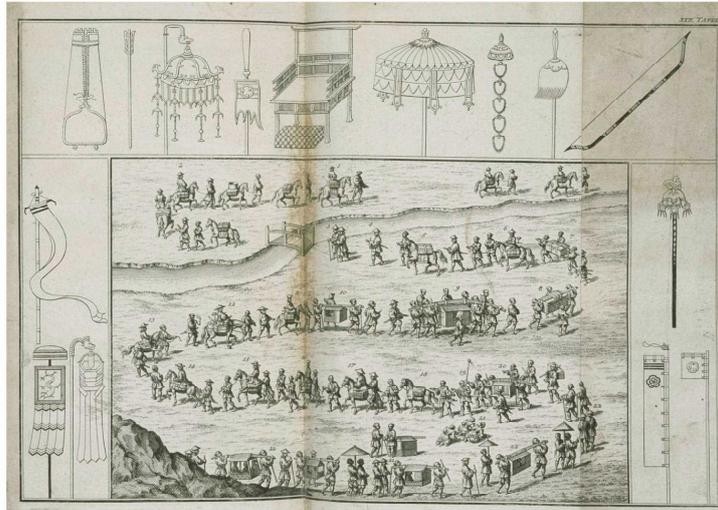


「正徳度朝鮮通信使行列図巻」より

〈朝鮮〉

- ・優遇されている。費用は全て幕府持ち。
- ・オランダの商人と比べて着飾っている。偉い人が分かりやすい。是非来て下さい（お金出してあげるよ）。人々も興味津々。武士など日本人が出迎えている。

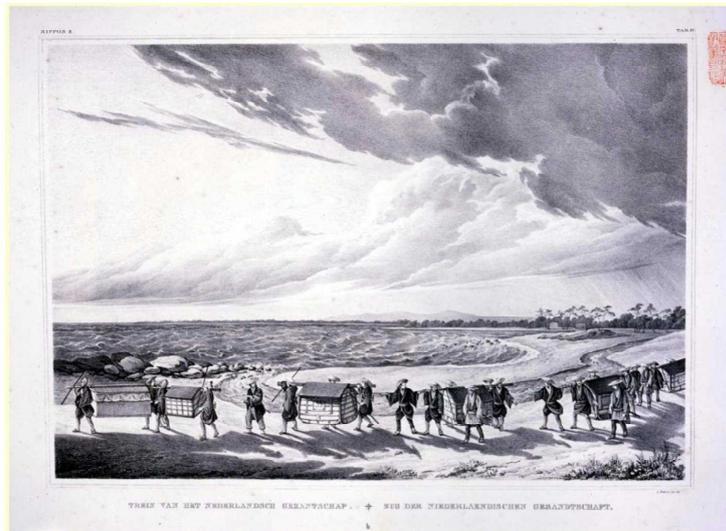
オランダ商館長の江戸参府の様子



ケンペル「参府道中記」(『日本誌』)より

※「参府道中記」(歴博所蔵、ケンペル著『日本誌』(蘭訳版))

オランダ商館長の江戸参府の様子



シーボルト「オランダ使節団の行列」(『NIPPON』第1冊)より

※「オランダ使節の行列」(福岡県立図書館所蔵、シーボルト著『NIPPON』第1冊)

〈オランダ〉

- ・参勤交代に似ている。費用は自腹。簡素。出迎えられていない。
- ・役職が少なく、簡素(運ぶ人と運ばれる人だけ)。勝手に来ていい(お金は出してね)。
- ・質素。

2 幕府の役人は通信使とオランダ商館長の江戸参府のあり方に、どうしてこれほどまでの違いを付けたのだろうか

- ・西洋が進んだ国だと日本が知らなかった。
- ・キリスト教を入れたくなかった。
- ・ヨーロッパの列強国に、アジアの国が優位だと分からせるため。
- ・オランダはキリスト教を布教する可能性があるから。
- ・大国だと思っている中国と友好な朝鮮と友好にするため朝鮮は優遇し、オランダは鎖国下でキリスト教の国をあまり入れたくないし、西洋の強さを分かっている。
- ・朝鮮は生糸が輸入できるから仲良くしておきたかった。
- ・鎖国したかったから、キリスト教徒と関わっていることが広まるのを恐れた。

3 もしあなたが通信使の登城やオランダ商館長の江戸参府の様子を見ている当時の民衆だとして、両方を見比べてどのような印象を持ったか

- ・朝鮮は日本と同じかそれ以上の力を持つ国で、オランダは日本より力が弱い国であると思う。
- ・なぜ接待に差をつけるのだろうか。なぜオランダは目立たないようにして江戸参府するのだろうか。
- ・朝鮮は非常に進んだ国のように見えて歓迎したいと思う。オランダは力がなさそうな国だなと思う。日本に何か頼み事でもしにきたのかのような印象。
- ・朝鮮は豪華な感じなので国力があって強そうだが、オランダはみすぼらしいので弱そう。
- ・朝鮮の方がオランダよりも力が強い印象。

4 朝鮮・オランダはこうした交流の持ち方をどのように感じていたと思うか

- ・満足していた。
- ・朝鮮は日本に迎え入れてもらって感謝している。オランダは自分たちの方が技術が進んでいるのに酷い扱いをされて怒っている。
- ・朝鮮は古来交易をこのようにしているから仲良い国だと思い、オランダは東アジアの交易のやり方を知らず、何も思わない。
- ・オランダは、日本からの扱いが雑でも関わっているから満足している。
- ・かわいそう。

5 論述「鎖国下における江戸幕府の外交のあり方とそのもたらした効果について、貿易のみの国も含めて 160 字以上 200 字以内で述べよ。」(解答例)

生徒 U「朝鮮と対馬藩を通し己酉約条に基づいて貿易を行い、通信使が往来していた。中国と冊封・朝貢関係にありつつ日本と交流があった琉球王国からは慶賀使や謝恩使が往来し、薩摩藩と貿易を行っていた。長崎奉行は中国商人やオランダと貿易関係にあり、オランダからは使節が往来していたはずだが簡素な往来であった。朝鮮からやってきた通信使を手厚く迎えることで日本の権力もアピールした。」(171 字)

生徒 K「江戸幕府は清・オランダ・琉球・アイヌ・朝鮮とのみ貿易をした。アイヌは松前藩が独占をし、清は出島だけで貿易をした。日本と清の両方につながっている琉球は薩摩藩に支配され、王の代替わりごとに謝恩使、将軍の代替わりごとに慶賀使を送った。宗氏と己酉約条を結んでいる朝鮮は幕府に通信使を送り、幕府は厚くもてなした。一方オランダ使節は冷遇され、民衆に幕府の強さをみせつける効果があった。」(184字)

〔授業後の感想〕

1 歴博展示パネル「江戸幕府を中心とした 17 世紀後半～ 19 世紀前半の貿易と外交」をみて、読み取ったこと、疑問に思ったこと、気づいたこと、どの程度読み取れたかなどの感想

- ・長崎とオランダの間で行われる使節の往来が点線になっていることに最初は疑問を感じず、注目もできなかったが、学習を進めていくにあたり費用がオランダ持ちであったことを知ると、非常に興味深く感じた。知識があればもっと詳しく資料を理解できるのだと思った。

- ・朝鮮・琉球は江戸に使節を送っていることは分かった。点線が何を意味しているのかを読み取ることは難しかった。

- ・4 つの口でそれぞれの国や地域と貿易をしていたが、交流面ではしている国とそうでない国があるのがわかった。交流するしないの区別は何だろうと思った。

2 朝鮮・オランダとの外交のあり方について、歴博ではどのように展示されていたか、展示をみての感想

- ・オランダはキリスト教を布教する可能性があった国だったため、オランダとの交流は積極的には行わなかった。そのため資料もあまり残っておらず、展示されていない。一方で朝鮮は通信使を遣わすなど正式な通信国だった。だから博物館に大々的に展示されている。

- ・歴博では朝鮮の外交の様子ばかり展示されていることに疑問があった。まるでオランダとの外交が存在しなかったような様子で不思議に感じたが、日本も費用を負担せず質素な往来だったことを知り、資料の少なさにも納得がいった。

- ・貴重な資料としてオランダの外交の様子をみると、質素な様子で着飾っていない往来であり、朝鮮との扱いの差を知った。

3 朝鮮・オランダとの外交のあり方について学んで、これまで持っていた印象とどう変わったか

- ・これまで日本は外交はどんな相手でも平等に行っているものだと思っていた。差別できるほど優れた国でもなかったと思うし、積極的な外交は全て同じ扱いをしていると考えていた。しかし今回朝鮮・オランダとの外交のあり方について学び、金銭の問題や使節の往来の違いなど外交のあり方に大きく差があることを知って、日本の外交の印象が変わった。

・これまで日本はアジアよりも列強の西欧を重視して外交していたと思っていたが、実際にはヨーロッパには軽い感じでもてなしをして、朝鮮には盛大にもてなしをしているのに驚いた。(秀吉の時には)日本は朝鮮を下に見ていたのに、どうしてなのか?という疑問も解決できた。

・交流のあり方について理解を深められた。気づかなかったところも授業で理解することができ、知識が多くなった。

5 成果と課題

(1) 成果

研究者が解釈して作成した博物館展示パネルは、本来分かりやすく書かれているはずという先入観もあって、実はその解釈が意外に難しいことに意外さを感じた。このように展示パネルの読み取り作業と、その根拠となる展示物との関連付けは、教科書の叙述通りにはいかないことを実感した。改めて歴史叙述の難しさを知った実践であった。

(2) 課題

この実践では、長崎の出島を通じたオランダとの関係が、日本とオランダの国家間の関係であるかのような印象を与えることになってしまった。しかし実態はオランダ東インド会社の日本支店との交流で、日本とオランダという国家間の交易ではない。あくまでもオランダ人商人が日本と東南アジアや中国との間で行っていた貿易が主であった。けれどもそうした実態は博物館展示資料からはなかなか見えてこない。東インド会社自体が商業活動のみを行う単なる企業ではなく、条約の締結権や軍隊の交戦権までも委託された勅許会社という点が、さらにその理解を難しくしている。今後の展示方法の改善を望む。

以上

[参考文献]

a 松井洋子「オランダ商館長の江戸参府とその行列」

b ロナルド・トビ「朝鮮通信使の江戸城登城・下城行列―狩野益信筆「朝鮮通信使歓待図屏風」を中心に―」(a・bともに久留島浩編『描かれた行列 武士・異国・祭礼』東京大学出版会、2015年所収)

c 松井洋子『ケンペルとシーボルト 「鎖国」日本を語った異国人たち』山川出版社、2010年

d ロナルド・トビ「異国と江戸の表象 - 朝鮮通信使の点描を中心に -」『歴博』第171号、2012年、国立歴史民俗博物館

e シーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』(東洋文庫87)昭和42年、平凡社

f 小出宗治『屏風絵の中の近世日本と世界-教室で扱う歴博展示』(歴博ブックレット20)、2002年、国立歴史民俗博物館

※この他、「四つの口」を扱った博学連携の実践としては、難波道成「教室から見た近世日本の「四つの口」― ICT を活用した歴博資料の教材化」(『学校と歴博をつなぐ―平成24・25年度博学連携研究員会議実践報告書』)などがある。